

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院北面回廊・北門の調査(飛鳥藤原第198次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、藤原宮中枢部分の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的にこなっています。2018年度は、大極殿院の北面回廊および北門の位置と構造の解明を目的として、大極殿の北側約1,050㎡を対象に発掘調査を実施しています。調査は2018年5月28日より開始し、現在も継続中です。

北面回廊については、戦前に日本古文化研究所が東半分を中心に部分的な調査をおこなっており、1977年には奈良文化財研究所が藤原宮第20次調査として発掘調査を実施しています。この2回の発掘調査では、礎石の下に据えた根石が遺存する状況を確認しましたが、残存状態がさほど良好ではなかったこともあり、回廊の構造や北門の位置についてはまだ検討の余地が残っています。

昨年度おこなった大極殿院東北隅部の調査(第195次)では、北面回廊と東面回廊の接続部において、礎石を据えるための穴や根石の分布を確認し、北面回廊東端の構造や柱間寸法を解明することができました。これを受けて、今回の調査では、第20次調査区と第195次調査区の間に残された未掘部分を調査するとともに、第20次調査区の北半を再発掘して、北門の位置と構造、および北面回廊の柱配置や柱間寸法の解明に取り組む予定です。

また、第20次調査では、藤原宮造営時に人工的に掘られた幅6m、深さ2mの大規模な南北溝を検出しています。この南北溝は、藤原宮の中心部分を南北に貫流しており、最下層の堆積土からは藤原宮



回廊礎石据付痕跡(東から)

造営にかかわる瓦片や材木の加工屑等が出土したことから、藤原宮造営時に資材運搬に用いられた運河であったと考えられています。また、この運河は出土した木簡から天武天皇の末年頃まで機能していたこともあきらかになっています。第20次調査における運河の調査成果は、藤原宮・京の造営が、天武天皇の在位中に遡ることをあきらかにした点で画期的な調査となりました。

今回の調査では、この第20次調査の際に検出した運河の北側部分を改めて詳しく調査する予定にしています。2015年に大極殿の南側で実施した第186次調査では、最新の土壌・地質調査の技術を用いて、運河機能時の流水・滞水の状況や、廃絶時の埋め立ての過程に関して、詳細な所見を得ています。今回の調査でも同様の分析を実施し、運河がどのように機能し、また役目を終えたのかについて、実態の解明に取り組むことにしています。

今年の夏は記録的な猛暑が続いており、過酷な環境のもと、体調管理に特に留意しながら調査を進めています。調査は、残暑も和らぐ9月末頃まで続く予定です。その頃には、重要な新知見をみなさまにお伝えすることができるものと思います。

(都城発掘調査部 大林 潤・廣瀬 覚)



調査区全景(北東から)